新しい臨床系トピックスシリーズを始めるに当たって
—編集委員長から

血栓止血誌は原著論文のほか，総説，トピックス等の欄を加えて一つの型を有する学会誌としてのその役割を果たして来た．中でもトピックスは血栓止血関連領域での新しい情報を紹介するユニークな欄として会員諸兄にも親しまれている．とくに原著論文数が最近減って来ているだけに，トピックス欄のこの学会誌に占める位置と役割は大きいものがある．この欄では従来，その折々の新しい情報を適宜選んで取り上げて来ていたが，第8巻2号（1997年4月号）からは新しい試みとして1つのテーマについて関連する情報を横断的に採り上げる，いわゆるシリーズものを開始した．その手始めとして血液凝固・線溶系に関与する諸物質のノックアウトマウスを採用し，主として岩永貞昭先生を中心として，化血研の諸兄に担当して戴いている．このシリーズの開催に当たっては，その目的，意義あるいは会員諸兄の日常の研究や臨床面での活動への含蓄などを岩永先生がお書きになっている通りである（血栓止血誌 8(2)：152，1997）．その後，このノックアウトマウスシリーズに続いて第10巻1号からは新たに「立体構造で見る凝固線溶蛋白質の作用機構」と題したシリーズを国立循環器病センターの宮田敏行先生，姫路工業大学の小出武比古先生にまとめ役をお願いして開始した．これによって最近，次々に明らかにされている個々の血液凝固線溶関連物質の，全体像とは言わないまでも，主な機能ドメインの立体像を紹介して来ており，会員諸兄からも好評を得ている．このように大きなテーマをとり上げながら血液凝固線溶機構を横断的に捉えることは，一見複雑に見えるこの反応機構に共通する現象や事実を総合的に理解する上で大きく貢献してくれているに違いない．

一方，これら二つのテーマがいずれも主として基礎的側面に焦点を当てたものであることから，臨床面が聊か手薄となっていたことは否めない．しかし，血液凝固や止血の機構の異常が臨床面で明らかに独立した疾患群に直結しているものも少なくない．そこで今回から血液凝固や止血機構の遺伝性異常をテーマとするトピックス・シリーズを取り上げてみることにした．何しろ限られた紙面と，年5回（学術集会号を除く）の発行という厳しい条件下での企画であるが，何とぞ御期待頂きたいと思う．この企画は慶応大学の半田誠先生，奈良県立医科大学の嶋緑倫先生，京都大学の高山博史先生にお願いした．御期待を乞う．

編集委員長　松　田　道　生